

1 京都府の地域生態系

1) 地域生態系

「京都府レッドデータブック 2002 年版」において、京都府が歴史と文化的伝統のある地域であることを強く意識して、生物種以外に地形・地質や自然生態系などを含めたリストを示した。このうち自然生態系では、「地域生態系、生育・生息地、人間一環境系の歴史的側面」という三つの分野に分けて記録した。地域生態系は、自然生態系の他二分野と関連が深い部分もあるが、ここでは地域の生態系の基礎になる植物群落を対象としてまとめた。これまで府内で行われてきた植物群落調査の報告書等を参考にしながら、新たに重要な植物群落の調査も行いリストの追加を行った。

地域生態系のレッドデータブックは、個々の生物種のレッドデータブックとは意義が異なる点に注意されたい。生物種については、ある種が絶滅のおそれがある場合には、状況を明らかにして、その保護・保全対策を行なうことは非常に意味がある。しかし生態系、特に植物群落の場合には、常に変化していることが前提であり、人が手を加えることで維持され、放置すると、もともとのいわゆる原植生にもどる。したがって、生態系の保全は、人の暮らしとの関わりの中でしか議論ができない。現在も原植生に近い状態で残っている生態系は、これまで人が手を付けることが少なかったために維持されてきたものであり、今後も周囲の環境を現状のままで維持することが重要となる。一方で、人手が入って維持されている生態系は、今後も同様の人手を付け加えることが重要である。つまり、これまで「普通」とされていた、人による管理が行われてきた里山（クヌギ、コナラ群落）などの生態系の保全のためには、地元の目的意識が不可欠である。しかし、時代の変化とともに利用目的が無くなり、保全対象としての重みづけが難しくなっているのが現状である。また、そのような「普通」の生態系は、これまでの調査などでは取り上げられておらず、既存のデータは少ない。特に市街地近くで特別に管理されている生態系以外は放置されて、常緑樹の林に変化しつつある。なお、従来の植物群落の調査では、研究者の研究及び解析の手法によって、同じ林に対して異なる名前が付けられている場合がある。これについては、最も一般的な名称で統一するようにした。したがって、取り上げた植物群落の名前は、優占種の名前で代表するような群落の名称としている。また、植物名は米倉（2012）にしたがった。

2) 植物群落の背景

京都府で見られる植物群落は様々で、限りなく手つかずの植生に近い状態の群落から、人手の加わった二次林や草原が存在する。植物群落の形態と人手の加わり方は関連しており、人手の加わる程度やその加わり方の変化に応じて、植物群落は常に変化をしている。京都府で見られる二次林や草原も、人手の加わる程度が異なることによる。これは、生態遷移といわれる現象によって、植物群落は人手が加わらなくなるとより原植生に近い方向に変化し、人手が強く加わることにより裸地の方向に変化をするためであり、植物群落はこのような動

的な変化の中にある。原植生は、主としてその場所の気候条件によって決まり、また地質条件等によっても異なる事が知られており、その場所ごとのいわば固有の原植生を持っている。現在見られる植物群落を現状のままで維持させるためには、現在までに恒常的に加わってきた人手を今後も継続して加えていく必要があるということである。これは一般的にはすべての植物群落に対して言えることであるが、特に遷移スピードが早い、より二次的な植物群落ほど、加わる人手の程度が変わるとその変化が目立つ。したがって、今後の植物群落の形態は、その植物群落を利用し続けてきた地域に暮らす人びとの意思によって異なる場合もあるであろう。このため地域生態系では、現状維持を目的とするのではなく、地域ごとの将来像を考えるための現状記録という目的を強く持つと考える。

2 京都府の地形地質と気候

京都府は日本列島のほぼ中央部に位置し、日本海側から内陸部にいたる南北に細長い形態をしており、その長さはおよそ 150 km に達する。北部は日本海に面して、比較的狭い平野部をもって山地に至っており、海岸部は複雑なりアス式海岸が多く、日本海に突出した丹後半島がかかえこむ若狭湾には宮津や舞鶴などの小湾が発達している。日本海に流れ込む数本の河川は、それぞれその中流部に沖積盆地を形作り、また上流部では山地で急峻な溪谷を形成している。

中央部は丹波高原と呼ばれる山地で、日本列島の脊梁山脈の一部であり、京都府域を日本海側と太平洋側とに区分している。その中には亀岡、福知山などの小盆地が点在し、また桂川や由良川の源流となる河川の河岸段丘などが各地に発達している。この丹波高原は老年期の高原状山地であり、西側はなだらかに兵庫県の山地に続き、東側では安曇川の断層谷で終わる。この丹波高原では、1,000 m を越える山地はなく、滋賀県との境に近い京都府中央部の東側に皆子山 (972 m)、峰床山 (970 m)、三国岳 (959 m)、鎌倉山 (951 m) などの京都府では最も高い山が集中している。また丹波高原の南側も京都北山連峰として愛宕山 (924 m) や竜ヶ岳 (921 m)、栈敷ヶ岳 (896 m) などの山地が見られる。京都府南部は、桂川、宇治川、木津川の三つの河川の扇状地が広がり、山城盆地となって広い平野部が形作られており、これを取り囲む山地と丘陵地で構成されている。これらの三つの河川は、この山城盆地に達する前には、周辺の山地に深い溪谷を形成している。気候的には、北部は日本海側気候に属し、また南部は太平洋側の気候区、特に瀬戸内気候区に属し、中央部はその中間的な気候を持ち、同時に山地帯の気候を併せ持つ。北部の丹後地域と中丹地域では、対馬海流が近くを流れるために、その影響を受けて年間の気温の格差は少なく、特に冬はかなり温暖になる事が特徴であり、南部と比べても 1~2℃程度しか差がない。しかしこの暖かい対馬海流の影響で冬の積雪は多く、この地域は日本全体の中でも豪雪地帯となっている。中部の南丹地域では、日本海型と太平洋型の中間的な気候であるが、高原上では内陸的な気候を持つために、夏の高温と冬の低温が特徴的である。南部の京都市・乙訓地域と山城地域では、気

候区としては太平洋側の瀬戸内気候区に属すとされているが、併せて内陸的な気候の影響も強く、京都盆地の底冷えや酷暑はよく知られている。

3 選定群落の概要

上述のような気候や地形を反映して、京都府の植生が形作られている。大きくは海岸から低地、丘陵、低山まで、およそ海拔 500 m 程度までがシイ・カシ帯（照葉樹林帯）であり、このシイ・カシ帯は、シイ帯とカシ帯とに分けることができる。また、そのシイ・カシ帯の上部をブナ帯（夏緑広葉樹林帯）が占めている。京都府内の山地は標高 1,000 m に満たないため、亜高山帯以上の植生は見られない。また、内陸性の気候を持つ地域があることもあって、いわゆる中間温帯と考えられるモミ林などが見られる。このような原植生に対して、人の定住、伐採などの影響を受けて、二次林や草原が成立し、また地形的な原因で湿地性の植生や水生植物が優占する環境等が成立している。

4 各地域の概要

1) 丹後地域と中丹地域

比較的海岸近くではタブノキ林が、舞鶴市冠島や伊根町青島のような海岸付近から内陸に至るまでのかなり広い範囲ではシイ林が分布している。カシ林については、福知山市毛原や綾部市君尾山にアカガシ林が見られる。福知山市大江町の岩戸山にはアカガシ、ウラジロガシ、カゴノキ、フジキ、アサダなどからなる原生林が残っている。アカガシ、ツクバネガシ、ウラジロガシは、個体は広く見られるが、群落単位で残っている場所は少ない。冷温帯落葉広葉樹林（夏緑広葉樹林）では、各地にブナ林が点在している。ブナ林は、本来標高 500 m 以上では広く見られるが、現在ではまとまった面積のブナ林は非常に少なくなっている。ブナ林ではササ類が林床植生に優占するのが普通であるが、シカの食害によって林床植生が失われる状況も生じている。またブナ林と隣接してミズナラ林が見られる。ミズナラ林はブナ林の代償植生（二次林）とされている林であるが、府内では、ブナ林に移行すると考えられる原植生に近いミズナラ林もあり、場所によっては、立地的な原植生の場合もある。しかし、2000 年以降のカシノナガキクイムシの加害によって、大径木の多くが枯損した。ブナ帯からシイ・カシ帯にかけての群落として、シデ林、ケヤキ林、コナラ林があげられる。シデ林、ケヤキ林は、その植生帯の土地的な極相としての原植生であると考えられ、コナラ林についてはシイ林の代償植生であろう。舞鶴市多祢寺山には大径木を含むイヌシデの優占するイヌシデ林が広がっている。モミ林は一般的には中間温帯の群落といわれているが、海拔のかなり低いところまで広く見られる。

針葉樹の自然林ではスギ林が見られる。宮津市上宮津の杉山、舞鶴市宇野が岳周辺には、スギの巨木が林立する天然林が広域にわたって見られ、貴重な群落である。その他、スギとヒノキの植林地があげられているが、社寺林が多い。社寺林は保護されてきた森林

であるために、その地域の原植生の要素を残したものであるといわれている。また、社寺の周囲に植林してその林を守ってきた社寺も多く、そのような植林地は、スギやヒノキだけの林ではなく、地域の林内に生育する多くの植物を含む林として成立しており、植林であっても老齢の人工林は、やはり地域の生態系としての価値は高いものと言える。

アカマツとクロマツの林も、それぞれ乾燥した尾根などに立地する林、及び海岸の林として典型的な森林であるが、1980年代からのマツ材線虫病によって、多くの場所で枯損している。現在では、アカマツ林は、やや標高の高い尾根部などに残っており、クロマツ林は、天橋立などのマツ材線虫病の防除が徹底されている地域で保全されているが、それ以外では衰退が目立っている。そのほか、モウソウチク、ササ草原、水生植物群落、砂丘植生などが見られる。10年以上前から、モウソウチク林が管理放棄によって、広葉樹林や人工林へ侵入し、急速に分布を拡大している。

2) 南丹地域

京都府の中部地域は、急峻な山地は少ないために古くから人為が加えられており、原植生に近いような自然林は非常に少なく、広くスギやヒノキの植林が行われている。

高原地形であるということもあって、シイ林はごく少なく、リスト化されている林も亀岡市と京丹波町の神社境内の二箇所のみである。落葉広葉樹の林は様々なタイプがあげられている。ブナとスギが混じった針広混交林がこの地域を代表する群落の一つであり、日本海側のブナ林の特徴を示している。またブナ林もコハウチワカエデなどのカエデ類やイヌシデなどのシデ類など、様々な種類の落葉樹を含んだ群落をつくり、特定の樹種がきわだって優占するような群落ではない。したがってこの地域の落葉樹林は、様々な名前で表現されていても、その種構成などについては連続している場合が多い。

北部地域と同様に社寺林周辺にスギの植林地が見られ、林業の対象としてばかりではなく、地域で大切に保全されてきた林である。また、大正時代に植樹され樹齢100年を超えるスギ、ヒノキの人工林が保護されている。

モミ林はイヌブナやコナラを伴い、南丹市の広域林道沿いなどの山地の上部斜面に広く認められる。また、そのような所の尾根筋や岩場ではツガ群落が見られる。そのほかにはアカマツ林と竹林があげられるが、アカマツ林は北部と同様に、マツ材線虫病の蔓延によって枯損している林分が多く、竹林も、北部同様に、管理放棄によって分布拡大している。また非常に特殊な水生植物群落として亀岡盆地のオニバス群落があげられる。

3) 京都市・乙訓地域と山城地域

この地域は、右京区（旧京北町）と左京区が、丹波高地の北部にまで達し、1,000 m近い標高の地域まで含んでいるが、多くは低山地から扇状地起源の平野部である。そのため注目すべき植物群落としてリスト化されている群落の多くが社寺林であり、古くから都とその周

辺の地域として強い人手が加えられ、また同時に信仰の地として各神社仏閣に所属している林が大切に保全されてきたものと考えられる。シイ林は京都盆地を取り囲む三山において、近年分布を拡大している。従来シイ林は、社寺林周辺にまとまって見られたが、1960年代以降、人手が入らなくなった山地斜面のアカマツ、コナラなどからなる二次林の下層植生として分布を拡大した。さらに、1980年代からのマツ材線虫病によるアカマツの枯損後は、急速に分布を拡大した。常緑広葉樹については、アカガシ、ウラジロガシ、ツクバネガシアラカシ、シリブカガシなどの樹種が優占する群落が見られる。近年調査された如意ヶ岳の尾根部に広くアカガシ、ツクバネガシの巨木を含む群落が認められる。特に保津峡急斜面のシリブカガシ林はこの群落が日本の北限にあたるものと考えられている。

ブナ林は北部の久多や八丁平周辺の600 mから900 mにわたる地域で、天然スギと混生しているが、群落としては小面積である。落葉樹林はミズナラ、コナラ、クリ、イヌブナ、アカシデ、イヌシデ、リョウブ、カエデ類と様々な組み合わせで群落が表現されている。クリは樹齢100年生以上の群落が八丁平湿原集水域において見られる。ここでも、2004年頃にミズナラ、コナラ、クリなどのブナ科樹木は、カシノナガキクイムシの加害によって大径木が枯損した。

エノキ・ムクノキ群落は、下鴨神社境内に広がっている。また、石清水八幡宮の境内でも認められ、宇治川、桂川に挟まれた堤に形成された立地にも、直径1 m以上の個体を含むエノキ・ムクノキ林が形成されている。

針葉樹林については、右京区京北町片波に直径数メートルにおよぶスギの巨木からなる群落があり、さらにヒメコマツ（ゴヨウマツ）、ヒノキが優占し林床にホンシャクナゲを伴う群落も認められる。モミ林もこの地域の山地部斜面で広く見ることができる。左京区北部のオグロ谷などにはアスナロ林が分布している。竹林は京都盆地の周辺部で、広く栽培されてきたが、管理不十分で、山地斜面にまで地下茎による分布拡大が急速に起こっている。このほか、八丁平湿原や深泥池の水生植物群落のような府内全域の中でも特異な植物群落が見られるが、シカによる食害が激しい。また幾つかの河川の水生植物群落や特に絶滅のおそれがあるとされているオニバス群落等があげられる。

4 京都府レッドデータブック（地域生態系）のカテゴリー

植物群落は、基本的にはその場所の気候と地質・地形に強く影響を受けて成立し、さらにその群落に対して人が手を加えることで変化をしていく。したがって、もともとの自然の状態を考え、その分布域が著しく減少している群落を保存すべき対象であると考えれば、もともとその場所に成立していた群落が最も貴重ということになる。また、現在のように身近な自然が多くは残っていない場合、そのようなもともとの群落ではなくても、人手が入って成立した群落も貴重で、管理をしながら現在のままにしておくことが必要という考え方ができるだろう。このように群落が人との関わりの中で存在するものであることを考えると、その

価値付けであるカテゴリー化は非常に複雑な問題を含むことになる。原植生と二次群落とを同じ範疇で評価することはできないだろう。

人が森林を荒した結果として存在するアカマツ群落ですら、現在では見られなくなりつつある。京都のアカマツ群落を回復、維持するために、コジイ林などのより自然度が高い群落に手を入れるような場合には、目標林型を決めて、植生改変の経過を記録する必要がある。また植物群落は、はっきりとした生育立地が決まっており、その場所に成立する群落は、日常的に人との関わりの中にあるものであり、ごく近い将来には、急な変化が起こる可能性もある。このような問題点はあるものの、基本的には現在の管理状態が維持され続けるということを前提としたうえで、京都府内で貴重な群落をリスト化し、以下の三つのカテゴリーに区分した。

「要特別対策」…群落を維持するためには、ごく緊急に特別な対策が必要

「要保全対策」…現状以外に保全の対策が必要

「管理維持」……現状の管理を維持することが必要

次に、群落ごとに「特徴」、「分布」、「保全に対する脅威」について述べる。各植物種の分布に関しては、Horikawa Y (1972, 1976)、林 (1969)、北村四郎・村田 (1971, 1979) によった。また、植物名は米倉 (2012) にしたがった。

執筆者 布谷知夫、高原光 (深泥池水生植物群落は宮本水文)